

5/8 午前

1 ©2022 YHAL, YITP, Kyoto University

9

京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

### 江口 世界史の中の日本

日本のおかれていまする歴史的な歴史的條件と、世界史の新しい段階に於ける主体的態度との問題が考えられるが、ここでは、科学者の責任、国際的交換等の問題に述べ前提として、特に後者の自主的文化的態度に於いて反省することに重点を置く。

#### 1. 現在の世界史的條件の特質

「平和」が実践的課題となること、即ち「平和」というような抽象的命題に於いて現実的に大衆と組織することによって、その下を国家と直接関係のない大衆運動が国際政治の場に一定の影響を与え、「平和」の維持に現実に貢献しているという事実は、歴史的には全く新しい段階と言いうる。この意味で、従来の社会科学の前提となつてゐる「階級」「民族」「国家」「思想的対立」等の概念を検討し直す必要がある。階級斗争、民族的国家的対立のあり方が、「人種」という課題の前に相対化される。(特に原子力という如き科学技術の発展の條件がある場合)

科学者、特に日本の社会学者は、この新しい新しい歴史的條件に留意する必要がある。

2. アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ等は、一面では「後進的」な状況にあるが、それだけに、新しい世界史的條件に、抽象的理論に依拠してではなく、いわば極めて即物的・自主的的態度で新しい課題に於いていよう。実際問題として、現在の世界の平和性、コングレガーションに至るまでの諸民族の主体的行動を支援してゐる。「中」論争といはれてゐるような事象について、中口が現実に向き合つて解決しようとしてゐるかという問題に即して考えようべきである。

#### 3. 日本の立場

歴史的に言えば、明治以来の日本の「近代史」、即ち日清日露戦争の過程は、一面では世界史の現実への下いれ打ちの仕方を示してゐることになるが、その下いれ現実の打ち手としての主体的態度はどうして失われぬか。現在の「平和」、アジア、特に中口との交流、また科学者の責任と論ずる場合に、この下いれと反省することが必要と思われぬ。(江口記)

c092-006-006

5/8 午前

朝永: コメント

(「学内のあり方と科学者の社会的責任」)

平和運動における自然科学者と社会科学者との協力の  
可能性について、社会科学者とのある程度会での  
意見を述べ。

自然科学者はイデオロギーとは違って平和運動に協力し  
やすいが、社会科学者における研究対象の密接にイデ  
オロギーに結びついていくという点のしよがある。し  
かし、客観的真理を追求するという科学者としての基  
盤は全く共通であり、両者の平和運動での協力の可  
能性もこの長にあると考える。」